

# 平成17年度国語部会研究主題

## 1 研究主題

### 生きる力が育つ国語科授業の創造 主体的・自覚的にことばを学ぶ子どもを育てる学習指導と評価

## 2 研究主題設定の理由

変化の激しい社会を主体的に生きるためには、生きて働くことばの力とともに、自他のことばを尊重する心情や態度が大事である。特に、人間形成の中核をなす国語科においては、ことばをとおして豊かに他とかかわり合う過程で、自らのことばをはぐくみ、自己実現していく子どもを育てることが求められる。

本県国語部会では、平成12年度から「生きる力が育つ国語科授業の創造」を主題として、実践研究に取り組んできた。子どもが主体であるという教育の原点を見据え、指導者は、一人一人の子どもの内に生きる力が「育つ」ことに意を注ぎ、「育つ」ように学びの場を設け、さまざまに指導・支援をしてきたのである。平成12年度以降の実践研究における主な成果を列挙すると、次のようになる。

- ・身に付けさせたいことばの力を系統化してとらえること（国語能力の明確化と国語能力表の作成）
- ・一人一人の子どものことばの力やことばの生活、ことばの学びをとらえること（学習者理解のあり方）
- ・年間あるいは6年間のことばの力を見通して取り組むこと（国語能力を踏まえた年間指導計画の充実）
- ・ことばの力やことばの生活を踏まえ、生き生きとした意義深い授業を展開すること（国語科授業の充実）
- ・国語能力の評価規準と判断基準の明確化、評価計画の具現化を図ること（評価のあり方）

これらの成果は、子どもに身に付けさせたいことばの力を明らかにし、ことばの生活や学びを見つめた指導と、それらをとらえた評価とを結び付け、一人一人に生きる力が育つ国語科授業を創造することにより得られたものである。つまり、これは、指導と評価を一体化させた国語科授業をめざしてきたものといえよう。

本県国語科教育の流れのなかで、以下のような教育への要請がなされてきた。まず、「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価のあり方について」の答申（教育課程審議会）による、目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）を重要視することや、指導と評価の一体化を図るといった考え方が示された。それを受け、「評価の規準」（国立教育政策研究所）が示され、基礎的・基本的な内容の習得の必要性や生きる力を育成するための評価のあり方が問われるようになってきた。また、「評価及び指導要録の手引き」（徳島県教育委員会）が出され、学力及び評価について、本県のとらえが示された。さらに、「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実改善方策について」（中央教育審議会）の答申がなされ、学習指導要領が見直されるなかで「基準性」が一層明確化された。

これまで、各郡市・各学校等において、国語能力表や評価規準などの策定、年間指導計画の作成が進められてきた。実際の授業で、国語科でいう「生きる力」を身に付けた子どもを育てるために、これまで策定されてきた国語能力表や評価規準などを、どのように生かしていくかということが次への課題となっている。

以上のことを受け、生きる力が育つ国語科授業を創造するために、指導と評価の一体化をめざして研究を深めていきたいと考え、本研究主題を設定した。

## 3 研究主題についての考え方

### (1) 「生きる力が育つ国語科授業」とは

「生きる力」とは、「知識・技能に加え、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力」、「自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性」「たくましく生きるための健康と体力」であり、子どもが主体的・自覚的に学習をすることをとおして育つものである。生きる力は国語科においては次のような力に分析することができる。

- ① 生活の中で言語を豊かにしていく力
- ② 言語による文化を享受し、創造する力
- ③ 言語を介して伝え合う力
- ④ 言語を介して情報を活用し産出する力
- ⑤ 言語によって思考する力

このような力を育てるためには、子どものことばの生活をとらえたいうえで、目標を明確にし、価値ある内容を取り上げ、必然的な言語活動を組織した単元や授業を構想・展開することが大事になってくる。現在まで実践されてきた、「単元学習の理念」が生かされた国語科授業が求められているのである。

## (2) 「主体的・自覚的にことばを学ぶ子ども」とは

子ども一人一人に「生きる力」を身に付けるためには、子どもが主体となって学習材と向き合い、言語活動に打ち込む単元・授業を展開していかなければならない。そのような単元や授業を構想・展開し、自らが学習の主体となって学ぶ力そのものを育てることに意を注ぎたい。また、ことばやことばを学ぶことへの自覚を深めていくことが、学ぶ力や自身のことばの生活を豊かにしていく力を育てることになる。自覚的にことばを学ぶ子どもを育てるためには、自己評価力の育成と重ねながら指導することが求められる。

以上のことから「主体的・自覚的にことばを学ぶ子ども」として、たとえば、次のような姿が考えられる。

- ① 進んで自己のことばの生活を見つめ、そのなかから、学ぶべき価値ある課題を発見する力、また、ことばの生活・文化についての課題を育てていく力や問い続ける力を有する子ども
- ② 「話す・聞く」「書く」「読む」言語活動を豊かに展開し、情報の収集、選択などを行いつつ、課題を解決したり、自己の考えをつくり出したりすることができる子ども
- ③ 「話す・聞く」「書く」「読む」言語活動を他（他者や学習材）とかかわりながら展開し、自己の考えを伝え合いながら、よりよい考えをつくり出していくことができる子ども
- ④ 一連の学習をとおして、ことばの学びの過程や成果を確認することができ、新たな学びへの意欲へと変えていく子どもや、振り返る習慣をもつなど評価への目を有する子ども

このような「主体的・自覚的にことばを学ぶ」子どもは、「単元学習の理念」が生かされた国語科の単元や授業が構想・展開される過程で育ってくる。その際、指導者は次のことに留意しなければならない。

- ① 一人一人の子どものことばの生活を見つめ、どのようなことばの力を身に付けることがその子にとって大切なのかを明確にすること。言い換えれば、その子が生きるために必要なことばの力をとらえ、目標を明確にすることから単元が構想され、そこでの言語活動や内容が生まれてくる。
- ② 子どものことばの生活に深く根ざした単元や授業を構想・展開すること。そこでの学びが、その子にとって価値ある課題として学習の対象に据えられ、必然性のある学びが組み立てられていくことが必要になってくる。
- ③ 言語活動をとおり、ことばの力を生きて働く力として、また、生活（生きること）に根ざした力として、より確かに、かつ豊かに身に付けること。言語活動がめあてとなるのではなく、その過程でどのようなことばの能力を育てるかという見極めと、どう発展させながらその力を育てていくかという見通しが求められる。

### (3) 「学習指導」についての考え方

副主題に「学習指導と評価」という文言を明記することにより、指導と評価を一体のものとしてとらえることにしたい。子どもの意欲や態度にも視点を当てた国語能力表、評価規準の考え方、評価計画などを学校や学級の実態に合わせて充実させるとともに、指導と評価を一体化させた国語科授業のあり方を明らかにしていく。そして、生きる力が育つ国語科授業を創造していきたいと考えたのである。

#### ① 「学習指導」について

生きる力が育つ授業を創造するためには、まず、「目標設定のあり方」が大事になってくる。このことは、近年の「目標に準拠した評価」を重視するという評価の考え方とも合致することである。そこで、本副主題にある「学習指導」という文言を、どのような内容をどのように指導するかだけでなく、どのように目標設定するのかという「目標設定のあり方」を視野に入れたものとして再認識したい。つまり、ここでいう「学習指導」とは、「目標設定のあり方」と「指導のあり方」という意味をもつものである。目標設定にあたっては、子どものことばの力をとらえることや国語能力表をより豊かに活用することが重要になると考えられる。指導の際には、子どもの学びの姿を国語能力表に立ち返ってとらえ、一人一人に応じた指導の手立てを講じることが肝要である。

本研究でいう「学習指導と評価」とは、「目標を設定して指導し、目標に照らして評価する」「指導したことを評価し、新たな目標を設定する」などという構造をもっている。したがって、学習指導と評価は、順序性を有するものではない。指導と評価を一体化させて、単元や授業を構想・展開していくことが求められているのである。

#### ② 「評価」について

本主題においては、「評価は子ども自身を育てるものである」という考え方に立って研究を進めていく。そのために、学んだ結果を評価することとともに、子どものふだんのことばの生活や学びの過程、学ぼうとする意欲や態度を継続的に評価することを重視していきたい。そうすることによって、評価が、一人一人の意欲を高め、ことばの力を付けられるものになるのである。

本研究では、指導と評価の一体化を図るために、次のようなことに留意したい。

ア 指導・評価を一連のものとし、目標に照らして、単元・授業導入前、展開時、終末時（後）の指導と評価を綿密に関連させること。

イ 子どもに学び続ける意欲や態度が育つよう目標を設定して、一人一人の成長の過程とらえた指導をし、その成長を認める評価になるよう配慮すること。

ウ 評価のための評価にならないようにという観点から、指導者と子どもの双方にとって、必然性や必要感を有する評価計画を立案し、評価活動を展開すること。

エ 子どもの立場に立つことを重視し、指導者は、子どものよさを認め、指導者と子どもが、互いに心の通い合う評価にすること。

オ 子どもの評価力の育成にも目を向け、「主体的・自覚的にことばを学ぶ」ことを重視し、自己評価力や相互評価力が育つように配慮すること。

## 4 研究の内容と方法

### (1) 主体的・自覚的にことばを学ぶ力を育てるために、次のことを行う。

#### ① 他とかかわり合いながら学ぶ力を育てる。

主体的・自覚的に学ぶ力を付けるためには、他とかかわり合う力は欠かせない。他（他者や学習材など）と出会い、ふれあい、深くかかわりあうことによって、自己の存在をとらえ直すことや、自己を振り返るための多様な視点を得ることができる。特に国語科では、他とかかわり合うための、伝え合い通じ合う力が育つよう計画的に指導・支援を行いたい。

#### ② 自己の学びをとらえる力を育てる。

学習に対する自己の取り組み方や考えたことなどを振り返り、記録として残していく学びが大事になる。「学習の記録」をまとめることをとおして、学ぶことの価値や、次への課題を

とらえる力が育ってくるのである。特に国語科では、必要なことを記録として書き記す力、継続して記録を書き重ねる力、学んできたことをまとめて「前書き」や「後書き」を書く力等が育つよう、意図的・計画的に指導していくことが求められる。

- ③ 単元構想の際には、身に付けさせたいことばの力を明確にし、必然性のある言語活動を組織する。

国語科の授業の目標は、子ども一人一人にことばの力を付けていくことにある。まず、6年間を見通して、それぞれの単元展開の過程で、どのようなことばの力を身に付けさせるかを明確にしておくとともに、基礎・基本となる「話す・聞く」「書く」「読む」ことばの力の実態をとらえることから始める。そのために、学校や学級などの実態を踏まえて、国語能力表を作成したい。そして、必然性をもって学ぶ過程で、生きて働く力として身に付けることができるような言語活動を組織し、指導・支援していくことが大切になってくる。

- ④ 子ども一人一人のことばの生活に根ざした単元や授業を構想する。

子どもが主体性をもって学習に取り組むためには、一人一人の子どものことばの生活を見つめ、その関心・必要感を把握することも欠かせない。子ども一人一人のことばの生活に根ざした「課題」を設定することに心を配るとともに、個に応じたさまざまな学びが成立するような「場」を設け、目的に応じて学習材を編成していきたい。

## (2) 指導と評価の一体化を図るために、次のことを行う。

- ① 単元展開の過程に応じ、目標を明確にした指導と評価のあり方を検討する。

適切な目標を設定するためにも、評価を指導に生かすためにも、子どもの学習意欲や態度を含めたことばの力を把握しておくことが不可欠である。そして、国語能力表などによって目標を明確にし、その目標を達成するための指導・評価の方法を明確にしておきたい。その際には、それぞれの単元や授業に関連をもたせ、年間を見通すことが不可欠である。

ア ことばの生活への目を開かせ、関心をもたせ、課題意識を育てるための日常的な指導と評価

イ 自己にかかわることとして、ことばを学ぶべき課題へと高めるための指導と評価

ウ 課題を追求する過程で、自らの学びやことばへの認識を深めるための指導と評価

エ 自己の学びを振り返り、身に付けたことばの力や次への課題をもつための指導と評価

オ 学習終了後、身に付けたことばの力やことばの学びへの意欲が、生活の場や、「総合的な学習の時間」・他教科等で生かされることへの見通しと、実際に生かされたことへの評価

- ② 「評価規準」と「子どもがことばの力を身に付けた姿」の考え方を学習指導に生かし、6年間を見通した年間指導計画・評価計画を作成する。

本研究にあたっては、「評価規準」と「子どもがことばの力を身に付けた姿の一例」の二つの文言を次のように考えたい。評価規準は、特定の単元・授業の達成状況を示したものである。これまでの実践研究における国語能力表づくりが、規準の明確化、適正化の基底となる。その規準に照らして子どもの姿をとらえ、指導に生かすものを「子どもがことばの力を身に付けた姿の一例」としたい。子どもの学びの中からこの姿を事前に想定しておくことで、指導者は実際の指導の手立てを得ることができる。したがって、実践や経験などを生かして、その姿を幅広く想定することが求められる。したがって、指導者は、この姿に子どもを追い込んだり振り分けたりするのではなく、子どもを把握し、目標設定や指導に生かしていくことに留意したい。

### 【「評価規準」と「子どもがことばの力を身に付けた姿の一例」の表現例】

例 評価規準……心に強く残ったことを中心に物語の感想を書いている。

姿の一例……「十分に満足できる」と判断される状況

作品のテーマに関わる部分や表現に着目し、自分の考えと記述とを結んで書いている。

「おおむね満足できる」状況を実現するための具体的な指導

(あらすじや場面のできごとに添えて、短い自分の感想を書いている。)

カードを活用したり、本文に傍線を引いたりして、感想をもった記述をしぼることができるようにし、感動を表現することばの例を示す。

(これは、あくまで「表現例」であり、各学校の実状に合わせて、工夫するものである。)

この評価規準並びに子どもの姿をもとに、国語科の特性を踏まえ、6年間を見通した指導計画・評価計画をめざしたい。

③ 「学習の手引き」の開発や「学習の記録」の活用をするなど、指導と評価の一体化を図る。

年間を通して子どもの姿を見据え、国語能力表等との関連から、適正に単元や授業の目標を設定したい。指導者が子ども一人一人を適切に評価しなければ、評価したことを目標設定や指導に生かすことは難しい。学んだ結果だけでなく、学ぶ過程を重視して評価し、設定した目標を達成できるように指導しなければならない。そのために、「学習の記録」などを活用して評価し、指導に生かす「学習の手引き」などの開発を図りたい。

### (3) 子どものことばの生活を豊かにするために次のことに配慮する。

① 「総合的な学習の時間」や他教科等との連携を図り、年間指導計画を作成する。

「総合的な学習の時間」や他教科等との連携を図ることにより、子どもの生活に根ざした国語能力を育てる場が豊かに、必然性をもって生じてくる。このように必然性をもった言語活動の場が年間、さらには6年間を見通して計画されることにより、身に付けたことばの力を発展・応用しながら繰り返し学んでいくことができる。互いのねらい(本質)を生かし合うことや多様な連携の姿を探ることに留意しながら、年間指導計画を作成したい。

② 図書館の効果的な利用を図る。

情報センターとしての利用だけではなく、読むことの楽しさを味わう場としての図書館の存在は、ことばの生活だけでなく、子どもの心を豊かに育てるうえでも大事になってくる。朝の読書や読み聞かせなど、読書への取り組みとともに、学校や地域の図書館の利用を子どものことばの生活に位置付ける。

③ 『作文読本』の効果的な活用を図る。

作文読本は、徳島県の子どもの書く力を育てるための月刊誌である。書く技術の育成面だけでなく、書くことを子どもの生活に位置付けるためにも、ぜひその活用を図りたい。また、子ども同士の作文を通じての交流にも役立てたい。

④ 学級や学校の言語環境づくりに心がける。

音声言語環境としての指導者の話しことばや校内放送、文字言語環境としての背面黒板や掲示版、新聞、さまざまな読み物などの活用を図る。